

NERIMA

2018

練馬区立美術館 ニュース

ART

MUSEUM

NEWS

22



練馬区立美術館
NERIMA ART MUSEUM

CONTENTS

- 03 — 館長あいさつ
- 04 — Museum Calendar
- 06 — 展覧会紹介
- 12 — 教育普及事業のご案内
- 14 — 2016年度新収蔵品紹介
- 20 — 公募展のご案内
- 21 — 貸出施設について
- 22 — 施設案内
- 23 — 交通案内

ワクワクドキドキするような美術館にしたい!!

今年で誕生から33年目を迎える練馬区立美術館は、年間を通じて様々な展覧会を開催してきました。今年も充実した内容で皆様によるこんでいただけるように努力してまいりたいと思っています。すこし昨年を振り返ってみると、練馬区の独立70周年という記念の年ということもあり、たとえば日本を代表する洋画家 藤島武二の展覧会など充実した内容で、多くの方々に喜んでいただきました。今年に入ってから、2月22日から「サヴィニャック」展がはじまっています。20世紀に活躍したフランスを代表するポスター作家で、サヴィニャックのしごとを通して、近代の広告というものを楽しく知ることが出来ます。また、4月26日からは、「戦後美術の現在形 池田龍雄展 — 精円幻想」が開催されます。1928年生まれの池田龍雄は戦後の民主化の中で岡本太郎や花田清輝など、多彩な芸術家と出会い、自らの創作活動を独特なしかたで展開していきます。また「生誕120年 中村忠二展(仮称)」では、中村のモノタイプという版画技法による大作、自作の詩と絵を組み合わせた詩画などが並びます。「芳年—激動の時代を生きた鬼才浮世絵師」展は、人気の幕末の浮世絵師月岡芳年の鬼気迫る独特の世界を紹介します。また「笠井誠一展(仮称)」では、静謐な静物画で知られる笠井誠一の魅力溢れる世界を、さらに江戸の彫金、柳川派の流れをくむ「人間国宝 桂盛仁の金工の世界(仮称)」、ユニマットグループの創業者高橋洋二氏のガラスコレクションである「一ユニマットコレクション—ルネ・ラリック展(仮称)」と充実した企画展を開催します。ほかにもギャラリートーク、ロビーコンサートなど数多くのイベントがあります。ぜひ今年もご注目ください!

さて、自己紹介をさせていただきます。この4月1日付けで新館長に就任した秋元雄史です。専門は現代美術ですが、練馬区立美術館では、幅広く近現代の展覧会を開催しているので、皆さんといっしょに視野を広げたいと思います。これからもワクワクドキドキする美術館活動をしていきます。どうぞご期待下さい!

2018年4月
練馬区立美術館 館長 秋元雄史

MUSEUM CALENDAR

	2階 展示室 1	3階 展示室 2・3
2018 4		
5	戦後美術の現在形 池田龍雄展 — 楳村幻想 2018年4月26日[木]～6月17日[日]	1
6		
7	生誕120年 中村忠二展(仮) 2 2018年6月22日[金]～7月29日[日]	第64回 練馬区美術家協会展 2018年6月22日[金]～7月1日[日]
8		
9	芳年 — 激動の時代を生きた鬼才浮世絵師 2018年8月5日[日]～9月24日[月・休]	3
10		
11	笠井誠一展(仮) 2018年10月7日[日]～11月25日[日]	4
12		
2019 1	人間国宝 桂盛仁の金工の世界 5 — 彫金の技 — (仮) 2018年12月1日[土]～2019年2月11日[月・祝]	練馬区中学校生徒作品展 2019年1月12日[土]～16日[水] 練馬区小学校連合図工展 2019年1月19日[土]～24日[木] 練馬区小中学校連合書きぞめ展 2019年1月26日[土]～27日[日] 第50回練馬区民美術展 2019年2月2日[土]～2月11日[月・祝]
2		
3		
4	— ユニマットコレクション — ルネ・ラリック展(仮) 2019年2月24日[日]～4月21日[日]	6

戦後美術の現在形 池田龍雄展 一精円幻想

会期：2018年4月26日[木] - 6月17日[日]

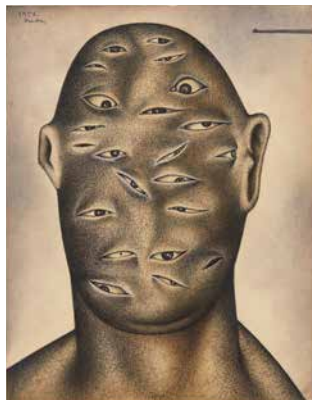
1928年に佐賀県伊万里市に生まれた池田龍雄は、特攻隊員として訓練中に敗戦を迎えます。占領期に故郷の師範学校に編入しますが、軍国主義者の烙印をおされ追放にあいました。戦中から戦後の大きな価値の転回に立ち会い、国家権力に振り回され続けたこの体験が、池田の原点を形作りました。

1948年、画家を目指して上京した池田は、岡本太郎や花田清輝らによる〈アヴァンギャルド芸術研究会〉に飛び込みます。以後、文学、演劇、映像とジャンル横断的に繰り広げられる戦後美術のなかで、多彩な芸術家や美術批評家と交わりながら、自らの制作活動を展開していきます。

個人として厳しく社会と向き合いながら、一個の生命として宇宙の成り立ちを想像する。90歳を目前に控えたいまなお歩み続ける彼の画業は、時代と切り結び思考する苦闘の足跡であり、戦後から現在にいたる日本の美術や社会のありようを映し出しています。

1968年から練馬区に住む池田は、練馬ゆかりの作家です。練馬区立美術館では1997年に「池田龍雄・中村宏」展を開催しており、今回は練馬では20年ぶりの池田龍雄回顧展となります。本展では、50年代から第一線で活躍し続ける池田の作品に息づく、戦後美術の現在形に迫ります。

観覧料：一般 800円



左：《巨人》1956年、インク、油彩、水彩、色鉛筆・紙 東京国立近代美術館蔵
右：《友に捧ぐ SETONAIKAI 13th MAY 1991》1991年、流木・ミクストメディア、佐賀県立美術館蔵

生誕120年 中村忠二展(仮)

会期：2018年6月22日[金] - 7月29日[日]

中村忠二(1898~1975)は、現在の兵庫県姫路市に生まれ、20歳で上京。各地を転々としながら制作を続け、晩年の20年間を練馬区貫井で過ごした作家です。

1919年日本美術学校に入学しますが翌年退学、日本水彩展や光風会、国画会に出品しながら洋画団体「歩人社」や「トアル社」などを結成し、精力的に活動を続けました。1958年に友人・水波博の影響を受けてモノタイプ(ガラスや金属に描画して紙に転写する版画技法)の研究を始め、忠二でなければできないといわれるほどの大作も生み出しました。

また自身の詩と絵を組み合わせた詩画の制作にも精力的に取り組み、生前5冊の詩画集を自費出版しています。一見荒々しい筆致ながらも繊細で叙情豊かな作品世界は、今なお多くの人をひきつけています。

死後3年で故郷の兵庫県立近代美術館が「ある画家の生涯と芸術展—中村忠二—」を、また1997年には姫路市立美術館で「中村忠二展」が開催されましたが、都内でのまとまった展覧会は今まで開かれていません。2018年は生誕120年に当たり、練馬ゆかりの作家中村忠二の作品を紹介する、またとない機会となるでしょう。

※会場は2階展示室のみ 観覧料：一般 300円



左：《からす西へ行く》1968年 モノタイプ・紙 練馬区立美術館蔵
右：《野の女》1959年 モノタイプ・紙 筑波大学・石井コレクション

芳年 — 激動の時代を生きた鬼才浮世絵師

会期：2018年8月5日[日] — 9月24日[月・休]

2015年の小林清親、2016年の歌川国芳に続き、本年は幕末・明治期の浮世絵の鬼才、月岡芳年(天保10年～明治25年・1839～92)の登場です。

芳年は江戸に生まれ、12歳で武者絵の名手、歌川国芳に入門。幕末期には武者絵を中心に、美人画、戯画など師の風に倣った作品を発表してきましたが、明治維新のきな臭い時代背景を通して、武者絵からリアルな戦闘画へと変化を見せます。この頃の作品をして“血みどろ絵”“無惨絵”の芳年としたイメージが後世まで強く持たれてきました。一時期、神経を病んでいたこともこうした印象に拍車をかけていたのかもしれませんが、しかし、それは一時のこと。“大蘇”と名乗り出してからは、新聞挿絵や西南戦争に取材した作品、歴史画・風俗画などで、人気浮世絵師への階段を一気に駆け上ります。晩年の10年間に描いた錦絵は芳年画を印象付ける名作・代表作揃いで、最期まで錦絵—武者絵や物語絵の可能性に懸け続けた、まさに“最後の浮世絵師”と呼ぶにふさわしい画業を展開しました。

そうした幕末・明治の浮世絵の泰斗と呼ぶにふさわしい芳年ですが、その画業を回顧する展覧会は意外と少なく、未だ、しっかりとした位置づけが行われていないと言って過言ではありません。

この展覧会は芳年のコレクションとしては質量ともに世界屈指といえる、西井正氣氏の収蔵品の中から選りすぐりの260余点で、芳年の画業の全貌を紹介するもので、15年ぶり、まさに待望の公開となるものです。

観覧料：一般 1,000円



左：《英名二十八衆句 福岡貢》1867年 錦絵
右：《芳年武者牙類 相模次郎平将門》1883年頃 錦絵

笠井誠一展(仮)

会期：2018年10月7日[日] — 11月25日[日]

笠井誠一(1932生)は、札幌市に生まれ、東京と名古屋を中心に活躍してきた油彩画家です。

17歳で上京し、練馬区内に居住。都立石神井高校、阿佐ヶ谷洋画研究所夜間部に通い、1953年東京藝術大学美術学部絵画科(油画・伊藤廉教室)に入学します。絵画科卒業、専攻科修了後は同大で副手を務めた後、1959年フランス政府給費留学生に合格。パリに渡りました。パリでは国立高等美術学校(エコール・デ・ボザール)のモーリス・ブリアンション教室で学び、サロン・ドートンヌに入選、フランス政府買い上げとなるなどの活躍を見せました。

1966年の帰国後は、愛知県立芸術大学で教鞭を執る(～1998年)と同時に東京都八王子市にアトリエを構え、東京・愛知を往復する日々が始まります。1970年代後半より、現在につながる静物画を中心とした制作が固められ、また1985年以降は立軌会に同人として参加しています。

笠井は、楽器や日用品などのモチーフを、室内に配した静物画で知られていますが、本展では初期の風景画や人物画から始まり、現在までの笠井の画業を辿ると共に、アトリエで使用されているモチーフや資料などから、作家の緻密な構図を紐解いていきます。

観覧料：一般 800円



左：《ウクレレとかりんのある卓上静物》1999年 油彩・キャンバス 刈谷市美術館蔵
右：《イーゼルと椅子》1963年 油彩・キャンバス 愛知県立芸術大学蔵

人間国宝 桂盛仁の金工の世界 —彫金の技— (仮)

会期：2018年12月1日[土] — 2019年2月11日[月・祝]

桂盛仁(1944生)は長年に亘り練馬区に在住し制作を続けている、人間国宝に認定された金工作家です。

江戸時代初期から続く彫金の一派、柳川派の流れを汲み、明治・大正・昭和期かけて、煙草入れなど装身具の彫金で大人気を博した豊川光長、桂光春を輩出した流派で、伯父である光春を継いだのが盛仁の父、桂盛行(1914~96)となります。

父、盛行のもとで修行した桂盛仁は打ち出しやレリーフ、彫金、色絵等の技法を駆使し、日本伝統工芸展などで高い評価を得てきました。宮内庁買い上げ、文化庁長官賞を受賞するなど研鑽を積み、2008年に重要無形文化財「彫金」保持者(人間国宝)に認定されています。

昨今、明治期の卓越した工芸作品を「超絶技巧」とし、ロストテクノロジーとしての評価がなされてきていますが、そうした工芸の技術は脈々と受け継がれてきていることは、柳川派、桂派、そして桂盛仁の金工を見ると明らかです。

この展覧会では、桂盛仁の初期から近作までを通観するとともに、桂のルーツである、盛行、そして、豊川光長、桂光春の作品も併せて展示し、今に生き続ける江戸彫金の技を再認識する展覧会です。

※会場は2階展示室のみ 観覧料：一般 300円



左上：《飛蝗 香盒》2009年 四分一、金、銀 作家蔵

右上：《夏爐 帯留金具》1998年 四分一、赤銅、銅、金、銀 作家蔵

下：《木菟 香爐》1993年 四分一、赤銅、金、銀 作家蔵

—ユニマットコレクション— ルネ・ラリック展(仮)

会期：2019年2月24日[日] — 4月21日[日]

ユニマットグループの創業者である高橋洋二氏は、洋の東西を問わず様々な美術品を蒐集し、コレクションを築き上げています。中でも、西洋美術コレクションは、ルノワールやドガなどの近代絵画、ヴェネチア・ガラスや香水瓶、ルネ・ラリックのガラス作品、さらには古代ギリシア美術など多岐に渡っています。

この類いまれなるコレクションから、本展では、20世紀初頭のアール・デコを代表するルネ・ラリックに着目し、その世界観に迫ります。ラリックは、宝飾デザイナーから始まり、やがてガラス工芸作家となります。彼は、花瓶、置時計、アクセサリ、香水瓶などを制作し、1920年代には大変な人気作家として広く認知されていました。1925年のパリで開催された現代装飾美術・産業美術国際博覧会ではバヴィリオンを与えられ、まさにアール・デコ様式を牽引する存在として、世界中にその名を轟かせることとなります。日本とも関係が深く、1932年に旧皇族の朝香宮邸(現在の東京都庭園美術館)のシャンデリアなどを手掛けています。

ユニマットグループのラリック・コレクションは、ガラス作家として活躍したラリックの1910年代から40年代までを網羅しています。貴重なラリック・コレクションを一同に展覧するまたない機会を広く楽しんで頂きたいと思います。

観覧料：一般 800円



左：立像「スザンヌ」1925年 オバルセントガラス、プレス形成、フロスト

右：花瓶「バッタ」1913年 色ガラス、型吹き成形、パチネ

教育普及事業のご案内

美術館の核となる、展覧会及び所蔵品への理解を深め楽しむために、様々な入口をご用意しています。子どもから大人の方までふるってご参加ください。

※ギャラリートーク、ロビーでのコンサート・パフォーマンス以外は、ほとんどが事前申込制です。

※各事業の詳細は、ねりま区報(30名以上の募集事業)および美術館ホームページに開催1ヶ月前から掲載します。また図書館などの区内施設にてチラシを配布しています。

展覧会を様々な角度から楽しむ

展覧会関連事業

ギャラリートーク、実技講座・ワークショップ、講演会、コンサート・パフォーマンス、鑑賞プログラム



ギャラリートーク

担当学芸員やゲストが展示室を回りながら展覧会についてお話しします。

コンサート

ロビーには1877年製のスタインウェイ社のピアノがあり、展覧会に合わせたコンサートが開かれます。



実技講座

展覧会に合わせて絵画や版画、彫刻など本格的な作品作りに取り組みます。



鑑賞プログラム 「トコトコ美術館」

テーマに合わせた作品鑑賞と絵本の読み聞かせ、工作をします。初めての美術館体験に!



人が集う場作り

美術館を楽しむワークショップ

四季のみじたく(小学4年生以上対象、年4回)
館内探検(5歳~小学2年生対象、年1回8月開催)

「四季のみじたく」

ものづくりに関わる作家さんをお迎えし、次の季節を考えながら制作します。写真はオリジナル包装紙作りです。



美術館の施設及び展覧会を学校の学習に スクールプログラム

① 団体鑑賞 ② 施設見学 ③ 職場体験 ④ 出張プログラム

内容に関してはその都度ご相談させていただいています。

平成29年度は36校58回実施しました。

※展示替え期間及び当館主催のイベント開催日にはお断りする場合があります。



美術館サポーターの活動

現在40名がサポーターとして活動しています。

主な活動は、美術関連記事の新聞切抜き、イベントの会場受付、サポータートーク、ねりまゆかりの作家調べなどです。

2016年度新収蔵品紹介

作品：計47件(寄贈)

朝井閑右衛門

(あさいかんえもん・1901-1983)

新収蔵全3件



上：《井の頭黎明塾》1943年 油彩・板 14.2×17.9cm

中：表(左)《昼寝する柳亮》裏(右)《静浦 江ノ浦にて》1940-41年 油彩・板 15.7×22.8cm

下：《豊干禅師騎虎図》1942年 紙本着彩 40.2×151.0cm



久野和洋

(くのかずひろ・1938生)

新収蔵全9件



上左：《DUOMO (大聖堂)が見える》2010-11年 油彩・カンヴァス 145.5×145.5cm

上左：《地の風景・明日香》2013年 油彩・カンヴァス 121.0×190.1cm

下：ジオット作《アッシジの聖フランチェスコ》ブレデッラの模写 1975-76年 卵黄テンペラ・金箔、板 61.0×150.0cm

鞍掛徳磨

(くらかけとくま・1930生)

新収蔵全3件



左：《洲之内さん》1999年 油彩・カンヴァス 73.0×50.5cm

右：《坐わる女》1990年代 油彩・カンヴァス 162.0×97.0cm



小林猶治郎

(こばやしなおじろう・1897-1990)
新収蔵全6件



上：《つどい》1927年 油彩・カンヴァス 24.0×100.0cm
下左：《兄の応召》1938年 油彩・カンヴァス 37.0×44.0cm
下右：《梅》1924年 油彩・カンヴァス 70.0×37.0cm

横井弘三

(よこいこうぞう・1889-1965)
新収蔵全2件



左：《母子像》1921年 漆・紙 73.0×50.5cm
右：《遅しきヒマワリ》1958-59年頃 リトグラフ・紙 53.2×38.2cm

茨木杉風

(いばらきさんふう・1898-1976)
新収蔵全16件



上：《とげ抜き蔵縁日》紙本墨画淡彩 108.7×93.8cm
下左：《東京空襲》紙本淡彩 120.7×73.0cm 下右：《サーチライト》紙本淡彩 120.7×73.0cm

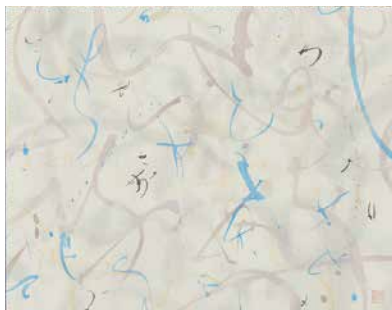
尾長良範

(おながよしのり・1962生)
新収蔵全1件



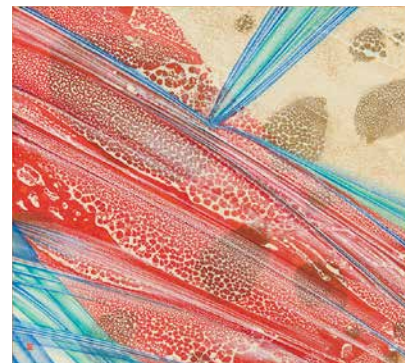
《Zone》2005年 絹本着色 35.3×45.0cm

小滝雅道
(こたきまさみち・1961生)
新収蔵全1件



《不立文字》2005年 絹本淡彩 36.7×46.4cm

武田州左
(たけだくにさ・1962生)
新収蔵全1件



《光の采610》2008年 紙本着色 46.0×51.2cm



《大満 PM6:16 / sep 2006》2006年 絹本着色 39.3×60.4cm

竹内啓
(たけうちさとる・1960生)
新収蔵全1件

間島秀徳
(まじまひでのり・1960生)
新収蔵全1件



《Kinesis No.209》2004年
絹本着色 96.3×39.0cm

山本直彰
(やまもとなおあき・1950生)
新収蔵全1件



《草紙洗》
絹本着色 114.4×41.7cm



《red door》2000年頃
絹本着色 52.6×25.6cm

塩川文鱗
(しおかわぶんりん・1808-1877)
新収蔵全1件



《蘭亭曲水図屏風》1858年 紙本墨画淡彩6曲1双 各173.3×370.0cm

松岡映丘
(まつおかえいきゅう・1881-1938)
新収蔵全1件

公募展のご案内

日頃の創作活動の成果を発表する場として、毎年1回「練馬区民美術展」を開催しています。11月に出品者を募集しますので、出品をご希望の方は、11月1日号(予定)のねりま区報に掲載の応募方法または区民美術展応募チラシ、当館ホームページをご覧ください。

第50回練馬区民美術展

会期

2019年2月2日(土)～11日(月・祝)

応募資格

区内在住(または在勤・在学)の15歳以上の方(中学生は不可)

募集作品について(予定)

洋画(油彩、水彩、アクリル、パステル、版画など)

日本画(水墨など)

彫刻・工芸(漆芸、陶芸、染織、和紙絵、押し花絵、切り絵など)



展示風景(第49回練馬区民美術展)

貸出施設について

皆さんに美術に対する理解を深め、発展させ、さらに主体的にご参加いただくため、館内の施設を貸出しています。ご利用になる施設によって、申込方法が異なります。詳しくはお問い合わせください。

区民ギャラリー

美術作品の展示発表を目的とする個人、サークル等に貸出します。

1日を単位として、連続6日まで利用できます。(展示・撤去作業の時間を含む)

※2018年度の企画展示室の貸出期間は、7月10日(火)～7月29日(日)、および12月1日(土)～1月10日(木)の予定です。

名称	面積	使用料	貸出条件
2階 一般展示室	85.5㎡	4,000円/日	
3階 企画展示室Ⅰ 企画展示室Ⅱ	200㎡ 208㎡	16,000円/日 (2室分)	企画展示室Ⅰ・Ⅱは、 両室利用が原則

創作室

美術作品の創作・研究・学習活動を目的とする個人、サークル等に貸出します。

午前・午後を単位として、1ヶ月に4枠まで利用できます。

名称	面積	定員	利用時間	使用料	貸出備品・器具など
2階 創作室	111㎡	30名	午前 10:00-13:00	1,200円	作業台、スツール(椅子)、 イーゼル、ホワイトボード、 プレス機、石膏モデル等
			午後 14:00-18:00	1,600円	

※練馬区長が認める生涯学習団体は、使用料減免制度に基づき50%減額します。



一般展示室



創作室

施設案内

開館時間 10:00～18:00（入館は17:30まで）

休館日 毎週月曜日（ただし、月曜日が祝休日の場合は開館し、翌平日休館）
年末年始（12月29日～1月3日）
展示替えなどによる準備期間中

観覧料 展覧会により異なります。
詳しくは各展覧会ページをご覧ください。
なお、いずれの展覧会も、中学生以下および75歳以上の方は無料でご覧いただけます。（年齢等の確認できるものを提示した場合に限る）

図録の販売 展覧会に合わせて作成した図録は、2階「図録・グッズコーナー」で販売しております。ご来館の難しい方は、通信販売の取扱いもございますので、お問い合わせください。

バリアフリー

- ・当館の展示室は2階・3階にございます。館内にはエレベーターを設置しております。
- ・誰でもトイレを設置しております。
- ・障害をお持ちの方は、当館のご利用に限り駐車場をお貸しできます。（事前予約制）
- ・館内で利用いただける、車椅子・ベビーカーを用意しております。（数に限りがあります）
- ・授乳室を設置しております。

練馬区文化振興協会友の会 会員募集！

年会費：2,500円(税込)
期間：入会月から1年間

練馬区文化振興協会が管理運営している施設の公演や展覧会などがお得に楽しめます。

特典1 情報誌を毎月郵送

特典2 チケット10%オフ
【対象施設】練馬文化センター
大泉学園ゆめりあホール

特典3 チケット優先予約
【対象施設】練馬文化センター

特典4 展覧会にご招待
（同伴者1名まで可）
【対象施設】石神井公園ふるさと文化館
練馬区立美術館

特典5 会員限定イベント開催
【対象施設】石神井公園ふるさと文化館
練馬区立美術館

入会方法

窓口 練馬文化センター、大泉学園ゆめりあホール、石神井公園ふるさと文化館、同分室、練馬区立美術館へ。

郵便振込 郵便局にある振込用紙に①友の会入会希望 ②住所③氏名 ④電話番号 ⑤生年月日 ⑥性別を記入の上、指定の口座に2,600円（会員証郵送料込）をお振込みください。
〈払込口座記号番号〉00160-3-514280

〈加入者名〉株式会社 五十嵐商会 練馬文化センター係
インターネット 協会ホームページ(https://www.neribun.or.jp/)の「友の会」バナーから手続きができます。2,700円（会員証郵送料・システム利用料込）をクレジット決済でお支払いください。

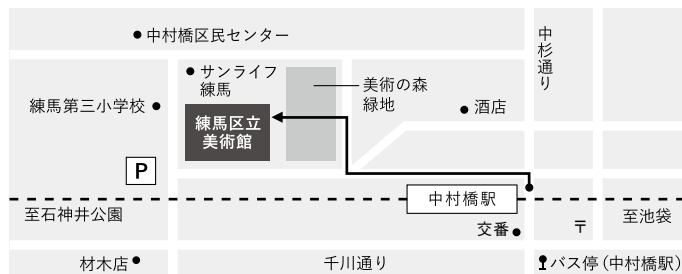
問合せ：公益財団法人練馬区文化振興協会 Tel: 03-3993-3311

交通案内

鉄道 西武池袋線「中村橋」駅下車 徒歩3分

バス 関東バス「中村橋駅」停留所下車 徒歩5分

阿佐ヶ谷駅北口 — 中村橋駅《阿01》系統終点
荻窪駅北口 — 中村橋駅《荻06》系統終点
荻窪駅北口 — 練馬駅《荻07》系統「中村橋駅」下車



※駐車場はございません。美術館周辺のコインパーキング(有料)をご利用ください。

※障害者用の駐車場については、直接お問い合わせください。

隣接する施設

貫井図書館（1階）

練馬区立美術館で開催された展覧会図録はもちろんのこと、これまでに行われた日本の近現代美術の展覧会図録や関連書籍など、美術に関連する書籍を多数取り揃えています。

美術の森緑地

美術館の前庭にあたる「練馬区立美術の森緑地」には、幻想美術動物園をコンセプトに、カラフルな動物を中心とした20種類32体の彫刻が設置されています。



ときめきの美 いま 練馬から

〒176-0021 東京都練馬区貫井1-36-16 TEL: 03-3577-1821
<https://www.neribun.or.jp/museum/>

（公益財団法人練馬区文化振興協会が練馬区立美術館の管理運営を行っています）

練馬区立美術館ニュース 第22号

発行：練馬区立美術館 発行年月日：2018年(平成30)4月1日
印刷：山田写真製版所 デザイン：星野哲也

